

言語・非言語行動によるターンの受け継ぎの表示

中井 陽子

キーワード

ターンの受け継ぎ・ターン開始表示・ターン終了表示・ターン開始の容認・非言語行動

1. はじめに

我々がコミュニケーションを行う際、言語行動だけでなく、それと共に用いられる非言語行動も大切な要因の一つである。したがって、日本語学習者が日本語で会話する際、言語行動による談話能力も必要であるが、同じように、それと共に用いられる非言語行動もその場の状況や場面に応じて適切に用いていくことは、自然なコミュニケーションをしていく上で大切な要素であると言える。ザトラウスキー (2001、2002b) は、アニメーションを語る会話の分析結果をもとに、日本語特有の身ぶりや顔の表情、声の調子の他に、言語行動と非言語行動の両方を用いて話し相手を会話へ参加させるように促す技術の指導を日本語教育で行う必要があることを指摘している。

本稿では、このような日本語会話教育のための基礎的研究として、会話の基本的単位を構成している「局部的構造」の分析であるターンの受け継ぎ、特に、ターンの受け継ぎの際に用いられる言語・非言語的表示にはどのようなものがあるかを分析・分類することを目的とする。まず、はじめに、ターンの受け継ぎの構造と、ターンの受け継ぎを言語的・非言語的に表示する要素についての先行研究を概観し、ターンの定義を再考し、ターンの受け継ぎの表示を分類する。最後に、三者間の日本語会話におけるターンの受け継ぎの表示の用いられ方を一例として見てみる。

2. 先行研究

2.1 ターンの受け継ぎの構造

Levinson (1983: 296) は、ターンの受け継ぎ (turn-taking) について、「参加者 A が話し、話し終わり、次に、もう一人の参加者 B が話し、話し終わるといような、二人の参加者の間で交わされる A-B-A-B-A-B という話の連続である」(筆者和訳) と定義している。また、Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) では、ターンは、統語上の単位 (文・節・句・語彙等) や、イントネーション等の韻律上の要素等、様々な特徴によって構成されているものであるとしている。そして、ターンの終わりには、話者が交替する可能性の

ある時点、つまり、ターン移行関連場所 (transition relevance place, TRP)」が存在するという。さらに、一つのターンから次のターンへ移る移行期 (transitions) には空白 (gap) と重複 (overlap) が起こらないのが普通であるとし、起こったとしてもそれは短いものであり、基本的に一人の参加者が一つのターンを取って話すという原則があると述べている。このようなターンの受け継ぎの仕組みについて、Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) は、以下のようなルールをまとめている。

1. For any turn, at the initial transition-relevance place of an initial turn-constructural unit:
 - (a) If the turn-so-far is so constructed as to involve the use of a ‘current speaker selects next’ technique, then the party so selected has the right and is obliged to take next turn to speak; no others have such rights or obligations, and transfer occurs at that place.
 - (b) If the turn-so-far is so constructed as not to involve the use of a ‘current speaker selects next’ technique, then self-selection for next speakership may, but need not, be instituted; first starter acquires rights to a turn, and transfer occurs at that place.
 - (c) If the turn-so-far is so constructed as not to involve the use of a ‘current speaker selects next’ technique, then current speaker may, but need not continue, unless another self-selects.
2. If, at the initial transition-relevance place of an initial turn-constructural unit, neither 1a nor 1b has operated, and, following the provision of 1c, current speaker has continued, then the rule-set a-c re-applies at the next transition-relevance place, and recursively at each next transition-relevance place, until transfer is effected.

(Sacks, Schegloff and Jefferson 1974: 704)

これによると、まず、最初の TRP で適用されるルール 1 における 1(a) では、現話者が次話者を選ぶと、選ばれた次話者が次に話す権利を得、かつ、次に話さなければならず、ここで TRP が起こるとしている。また、1(b) では、現話者が次話者を選ばない場合、参加者のうちの誰かが次話者として自己選択でき、最初に話した者が次のターンを取る権利を得、ここで TRP が起こるとしている。そして、1(c) では、現話者が次話者を選ばず、しかも、参加者のうち誰も次話者として自己選択しない場合は、現話者が自分のターンを続けて話してもよいとしている。そして、ルール 2 では、1(c) で現話者が自分のターンを続けて話した場合、話者が交替するまでルール 1(a)-(c) が繰り返し適用されるとしている。

このように、Sacks, Schegloff and Jefferson (1974) と Levinson (1983) は、ターンの受け継ぎの構造的特徴を述べている。これに対して、Edelsky (1981: 207) は、意味的、内容的特徴からターンについて、「(非言語行動も含めた) 本筋の話 (an on-record speaking) であり、かつ、その背後には実質的、かつ、機能的なメッセージを伝達する意志が存在するものである」(筆者和訳) と定義している。そして、会話の本筋の流れとは直接関係しない低い声でやり取りされる話 (例: 会議進行中にコーヒーを勧める等) や、実質的意味を持たないあいづち等の「励ましの言葉 (encouragers)」等は、「脇の話 (off-record speaking)」であり、ターンとはみなされないとしている。

以上は、一人一人の参加者が単独でターンを保有しながら会話を進める傾向が強いと言われている英会話でのターンの受け継ぎの分析である。では、あいづちの発話の多いと言われている日本語の会話分析におけるターンの受け継ぎは、どのように捉えられているのであろうか。メイナード（1993）では、「(speaker-) turn」を「発話順番」と和訳し、以下のように定義している。

「発話順番」とは、会話において一人の話者が話す権利を行使するその会話中の単位で、会話の当事者によりその何らかの意味又は機能を持っていると認められたものである。しかも、ある発話が誰かの発話順番であると認めるためには、話し手と聞き手両者とも発話の順番を取る者が何かを言うことを認め、それを補う形で聞き手は聞き手の役目をひき受けなければならない。このような状況が確認される時、話し手が発話順番をとったとする。

（メイナード 1993: 56）

さらに、Schegloff（1982）が英会話で用いられる“Uh huh”が「続けてというシグナル (continuers)」（メイナード 1993 和訳）であり、ターンを取らないとしていることをふまえて、メイナード（1993: 58）は、「あいづち」について、以下のように定義している。

話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現（非言語行動も含む）で、短い表現のうち話し手が順番を譲ったとみなされる反応を示したものは、あいづちとしない。

（メイナード 1993: 58）

このことから、メイナードは、一人の参加者のターンは、別の参加者の言語的・非言語的承認と支持が必要であり、かつ、別の参加者のあいづちが数回入っても、まだ続いているものとして捉えていることが分かる。

次に、李（1995: 13）は、上記のメイナード（1993）をふまえて、「発話順番」(turn-taking) を「一人の話し手が話し始めてから話し続けることをやめるまでを指すもの」と定義している。さらに、李（1999: 225）では、「話し続けることをやめる」ということとして、(1)「話す機会を他の会話参加者に譲るため、話し続けることをやめる（他の会話参加者に情報や同調を求めること）」、(2)「話がもう終わったので、話し続けることをやめる（情報提供行動を終えること）」、(3)「話がまだ終わっていない時、他の会話参加者の発話による遮りで、話し続けることをやむを得ずやめる」という状況を挙げている。さらに、李（1995、1999）は、前の参加者が話し続けることをやめても、他の参加者がターンを取って話し始めず、「長いポーズ」が入った後に、前の参加者がまた話し始めた場合は、別の新しいターンを開始したものとして分析している。また、西原（1991: 11）は、Bergmann（1990）をもとに、ターンの終了要因として、突然の飛び入り参加者の出現や、別の事に気をとられたりして、話が一時的に脱線してしまうというような要因を挙げている。

また、牧野（2000: 99）は、杉戸（1987）の「実質的な発話」と「あいづち的な発話」の区別をふまえて、ターンを「話し手の実質的な発話で構成され、現在の話し手が実質的な発話を始めてからそれを終えるまで、つまり長い沈黙や他からの邪魔、次の話し手の実質的な発話によって区切られる連続した一人の話し手の発話である。」とし、あいづち的な発話については、「単独ではターンを構成しえない」としている。

このように、日本語の会話でもターンの受け継ぎの分析が行われているのであるが、ここで問題になるのが、和訳の仕方である。Turnは「話順（中田1990）」「発話順番（メイナード1993、李1995、1999）」等とあり、また、Turn-takingも「順番取り（山崎・好井1984）」「話者交代（安井・奥田1990）」「話者交替（メイナード1993）」など様々である。ここで注意したい点は、「発話（utterance）」という言葉である。杉戸（1987: 83）は、「発話」について、「ひとりの参加者のひとまとまりの音声言語連続（ただし、笑い声や短いあいづちも含む）で、他の参加者の音声言語連続（同右）とかポーズ（空白時間）によって区切られるごとに1単位として数えようとする単位である」と定義し、「実質的な発話」と「あいづち的な発話」²の2つの発話を区別している。メイナード（1993）と牧野（2000）に従うと、ターンには、杉戸のいう「あいづち的な発話」は含まれないため、「発話」という言葉を用いて、turn-takingを「発話順番」と和訳すると誤解を生じさせてしまう。また、ターンとみなされない「あいづち的な発話」も音声的、言語的には、「黙っている人」の反対の「話している人」になるので、ターンを持っている人について「話者」や「話」という言葉を用いて「話者交替」、「話順」と言うのも、まぎらわしい。

2.2 ターンの受け継ぎの表示

ターンの受け継ぎのタイミングは、参加者の間でどのように言語的、非言語的に表示（signal）されているのであろうか。以下、ターンの受け継ぎの表示が用いられるタイミングで分類した先行研究と、視線や頭の動き等の個別の非言語的表示がターンの受け継ぎの構造の中でどのように用いられているかについて分析している先行研究を見てみる。

2.2.1 ターンの受け継ぎの構造の中での言語的・非言語的表示

Sacks, Schegloff and Jefferson (1974: 719) は、TRPの間の空白と重複を避けるために、参加者は自分のターンの開始と終了を示さ（signal）なければならないと述べている。そのためには、次話者は、ターン開始要素（turn-entry devices）、つまり、前置開始（pre-starts）によって、自分のターンの開始を示すという。また、現話者は、ターン終了要素（turn-exit devices）つまり、後置終了（post-completers）によって、自分のターンの終わりを示すという。

さらに、Schegloff (1996: 92-93) は、ターンが始まる前のまだはっきりとは識別できない時点で用いられる、話の始まりの要素、つまり、次のターンの始まりを投射（project）するものとして、前置開始要素（pre-beginning elements）があると述べている。また、ターンの終わりに用いられるものとしては、後置終了表示（post-completion stance markers）があると述べている（Schegloff 1996: 92）。

また、Duncan and Fiske (1985: 44-45, 54) は、ターン終了表示（a complete turn signal）は、1. イントネーションの起伏（intonation contours）の使用、2. “you know” “or something”等の決まり文句（stereotyped phrases）、3. 文法節の完了、4. 音節母音の引き伸ばし（paralinguistic drawl on certain syllables）、5. 身ぶりの手の動きの停止、という5つの行動を通して行われると述べている。

次に、日本語の会話分析を行った李（1995）は、次の4つの「発話順番の交替表示」を分析している。まず、「発話順番の終了表示」とは、「発話順番の終了を他の参加者に知ら

せるための標識」であり、発話順番の末尾に現れるとしている（李 1995: 14）。次に、「発話順番の譲渡表示」とは、情報要求や同意要求によって「発話順番を他の会話参加者に譲ることを表すもの」であるとしている（李 1999: 15）。そして、「発話順番の取得表示」とは、「発話順番を自主的に取ること」を他の参加者に知らせるものであるという（李 1995: 16）。最後に、「発話順番の受取表示」とは、「今までの話し手から譲られた発話順番を（中略）受動的に取ること」を他の参加者に知らせることであるとしている（李 1995: 16）。さらに、参加者がターンの冒頭か途中で他の参加者の注目を引くために用いる「注目行動の要求表示」があるとしている（李 1995: 17）。

また、高梨（2002）は、受け手を選択する際の言語的手段として、呼びかけなどの明示的手段や、人称代名詞、丁寧体、非丁寧体、受け手選択を含意できる語句を用いる非明示的手段等を挙げている。さらに、非言語手段としては、視線、身体姿勢、指差し等があるとしている。

2.2.2 視線による表示

視線とターンの受け継ぎの表示の関係について、Goodwin（1980: 275, 287 筆者和訳）は、聞き手と話し手の視線を分析し、次の二つのルールを掲げている。

ルール1：話し手はターンの途中で聞き手の視線を得なければならない。

ルール2：話し手が聞き手を見ている時、聞き手は話し手を見なければならない。

このように、聞き手が話し手を見るという行為は、「聞いているということ (hearer'ship)」、つまり、「話に従事しているということ (engagement)」を示す一つの方法であり、もし参加者が互いに目を合わさないでいる場合は、一時的に「話に従事していないということ (disengagement)」にもなるとしている（Goodwin 1981, 1986: 46）。

2.2.3 頭の動きによる表示

頭の動きとターンの受け継ぎの関係について分析している Maynard（1987, 1989）、メイナード（1993）によると、下に下げてまた上に戻す頭の縦ふりの動き（うなずき）の機能には、同意や承認の機能だけでなく、強調や確認、節のマーカ、肯定、あいづち、リズム取りの他、ターンの受け継ぎに関係するターン表示の機能があるという。頭の動きによるターン表示には、ターンが終了することを伝える表示（turn end marker）、ターン取得の前ぶれの表示（preturn claim）、沈黙などの「間発話順番状況（turn-transition period）」に用いられる「埋め込み表現」（turn-transition period filler）、放棄・譲渡されたターンを受け取ることを承知したという表示の機能があるという。ここでいう「間発話順番状況（turn-transition period）」とは、「話し手が発話順番を終了し、聞き手が話し手として発話順番を開始するまでの間の状況」であり、「順番取りをするように相手から指名されたり、相手の順番辞退や、順番終了を知らせるシグナルを認めた者が次の発話順番をとるように期待される」（メイナード 1993: 57）状況であるとしている。

2.2.4 ターンの受け継ぎの表示についての先行研究のまとめ

以上見てきた先行研究で挙げられているターンの受け継ぎの表示を【表1】にまとめた。この表では、ターン開始表示、ターン終了表示、ターン開始の容認表示、ターン移行期で

用いられる表示をそれぞれ、言語的ターン表示と非言語的ターン表示に分類した。なお、「ターン移行期」とは、メイナード (1993) の次にターンを取ると期待されている者がいる「間発話順番状況」と、次にターンを取ると期待されている者が特にいない状況の両方を含んでいる状況である。つまり、「ターンを誰も持っていない状況」であると定義することにする。

【表 1】 先行研究におけるターンの受け継ぎの表示

	言語的ターン表示	非言語的ターン表示
ターン 開始表示	<ol style="list-style-type: none"> 1. ターン開始要素 (turn-entry devices) / 前置開始 (pre-starts) : “well” “but” “and” “so” (Sacks, Schegloff and Jefferson 1974) 2. 注目行動の要求表示 : 「あのう」「～ねえ」「～さあ」「あのねえ」「ほら」(李 1995) 3. 発話順番の取得表示 : 「えー (↓)」「うん (↓)」(李 1995) 4. 発話順番の受取表示 : 「はい (↓)」「えー (↓)」「うん (↓)」(李 1995) 5. 前置開始要素 (pre-beginning elements) : “uh(m)” (Schegloff 1996) 	<ol style="list-style-type: none"> 1. ターン取得の前ぶれの表示 (preturn claim) : 頭の縦ふり (Maynard 1987, 1989, メイナード 1993) 2. ターン受取の表示 : 頭の縦ふり (Maynard 1987, 1989, メイナード 1993) 3. 前置開始要素 (pre-beginning elements) : 頭・視線を向ける、身ぶり (gesture) の開始、表情を作り始める、両唇を開ける、咳き、咳払い、息を吸う音 (Schegloff 1996)
ターン 終了表示	<ol style="list-style-type: none"> 1. ターン終了要素 (turn-exit devices) / 後置終了 (post-completers) : 付加疑問 (Sacks, Schegloff and Jefferson 1974) 2. ターン終了表示 (a complete turn signal) : “you know” “or something” 等の決まり文句、文法節の完了 (Duncan and Fiske 1985) 3. 発話順番の終了表示 : 「はい (↓)」「えー (↓)」「うん (↓)」(李 1995) 4. 発話順番の譲渡表示 : 「ねえ」「でしょう (↑)」(李 1995) 5. 後置終了表示 (post-completion stance markers) : 放棄 (disclaimers) 「知らない」 (“I dunno”)、終助詞 (Schegloff 1996) 6. 受け手選択手段 : 呼びかけなどの明示的手段、人称代名詞、丁寧体、非丁寧体、受け手選択を含意できる語句を用いる非明示的手段 (高梨 2002) 	<ol style="list-style-type: none"> 1. ターン終了表示 (a complete turn signal) : イントネーションの起伏、音節母音の引き延ばし、ジェスチャーの手の動きの停止 (Duncan and Fiske 1985) 2. ターン終了表示 (turn end marker) : 頭の縦ふり (Maynard 1987, 1989, メイナード 1993) 3. 後置終了表示 (post-completion stance markers) : うなずき、表情を作る、肩をすくめる、姿勢を変える、笑う、咳き、息を吐く、ため息をつく、息を吸う (Schegloff 1996) 4. 受け手選択手段 : 視線、身体姿勢、指差し (高梨 2002)
ターン 開始の 容認表示		<ol style="list-style-type: none"> 1. 話に従事している表示 (engagement display) : 視線を送る (Goodwin 1980, 1981, 1986)
ターン 移行期で 用いられ る表示		<ol style="list-style-type: none"> 1. 話に従事していない表示 (disengagement display) : 視線を互いにそらす (Goodwin 1980, 1981, 1986) 2. 埋め込み表現 (turn-transition period filler) : 頭の縦ふり (Maynard 1987, 1989, メイナード 1993)

3. 会話データ分析

以下、実際の会話の相互作用の中で参加者がどのようにターンの受け継ぎを言語的・非言語的に表示しているのかについて、短い会話部分を取り上げて見てみる。本稿では、特に、言語的表示と、頭、手、視線の動きによる非言語的表示を分析する。

3.1 本稿のターンの定義・ターンの受け継ぎの表示の分類

本稿の分析では、「発話」「あいづち」「話者」等の用語で誤解を招かないために、turn を「ターン」とカタカナ表記し、turn-taking を「ターンの受け継ぎ」と和訳することにした。また、ターンを取得して話している参加者を「ターン保有者」と言うことにした。なお、先行研究の分析について述べる際は、先行研究で用いられている用語をそれぞれ用いるようにした。

次に、Sacks, Schegloff & Jefferson (1974)、Levinson (1983) のターンの特徴、ターンの受け継ぎの仕組み、Edelsky (1981) のターンを「本筋の話 (an on-record speaking)」とする観点、杉戸 (1987)、牧野 (2000) の「実質的な発話」「あいづち的な発話」の区別、西原 (1991) のターンの終了要因、メイナード (1993) のターンとあいづちの区別、李 (1995) の「話し続けることをやめる」ことの分類を参考に、本稿では、ターンを以下のように定義する。

ターンとは、会話の中で、一人の参加者が話を開始してから終了するまでの連続した単位であり、文・節・句・語彙等の統語的単位、イントネーション等の韻律的単位、非言語行動の単位で構成されているものである。また、ターンは本筋の話に関係する実質的な発話から構成されており、あいづち的な発話やうなずきはターンに含めない³。したがって、一人の参加者のターンの間に、別の参加者のあいづち的な発話が数回打たれても、そのターンは終了したことにならない。ターンが終了するのは、ターン保有者が自らの意志で話すのをやめてターンを終了させたり、他の参加者にターンを譲ったりする場合と、他の参加者の実質的発話の開始や、外的事情（例：突然の来客、地震等）でターンを遮られたりした場合である。また、長い沈黙の後に、前と同じターン保有者が再び話し始めた場合は、新たなターンが開始されたことになる。

さらに、【表1】の先行研究におけるターンの受け継ぎの表示の分類を参考に、ターンの保有状態とターンの受け継ぎの表示を【表2】のように分類してみた。

まず、【表2】の左端の「会話のターン保有状態」であるが、「参加者の誰かがターンを保有している状態」と「参加者の誰もターンを保有していない状態」の二つに分類した。前者は、一人の参加者、または、二人以上の参加者（ターン重複状態）がターンをこれから保有しようとする直前の状態、または、既に保有している状態を指す。後者は、参加者の誰もターンを持っていない状態、または、取ろうとしない状態を指し、ターン移行期にあたる。

次の2列目は、「参加者のターン保有状態」を表し、参加者がターンをどのように持っているか、あるいは、持っていないかによって、4つに分けた。一つ目の「ターン保有希望者」とは、ターンを取りたがっている参加者を指す。二つ目の「ターン現保有者」とは、ターンを既に取っている参加者を指す。三つ目の「ターン非保有者」とは、ターンを持つ

【表2】 ターンの受け継ぎ表示

会話のターン保有状態	参加者のターン保有状態	ターンの受け継ぎ表示	
1. 参加者の誰かがターンを保有している状態	1. ターン保有希望者	1. ターン開始表示	a. 前置ターン開始表示 (自己選択)
			b. ターン取得表示 (自己選択)
			c. ターン受取表示 (他者に選択される)
	2. ターン現保有者	2. ターン終了表示	d. ターン放棄終了表示 (次のターン保有者を選択しない)
			e. ターン譲渡表示 (次のターン保有者を選択する)
	3. ターン非保有者 4. ターン非保有希望者	3. ターン開始の容認表示	
2. 参加者の誰もターンを保有していない状態			4. ターン移行期表示

ていない参加者を指す。最後の「ターン非保有希望者」とは、ターンを取りたがっていない参加者を指す。「ターン非保有者」と「ターン非保有希望者」は、区別が難しいため、同じ欄に入れた。

3列目は、ターンの受け継ぎ表示を、「ターン開始表示」、「ターン終了表示」、「ターン開始の容認表示」、「ターン移行期表示」の4つに大きく分けた。まず、「ターン開始表示」とは、ターンが始まる直前、または、直後の数秒の間に用いられる表示であるとし、さらに、次の3つの表示に分類した。一つ目の「前置ターン開始表示」とは、参加者がターンを取る直前か直後に他の参加者の注目を引いて次にターンを取って話したいということを伝えるために用いる表示である。これは、Sacks, Schegloff and Jefferson (1974) の“well” “but” “and” “so” 等による「前置開始 (pre-starts)」、Maynard (1987, 1989)、メイナード (1993) の「ターン取得の前ぶれ (preturn claim)」としての頭の縦ふり、Schegloff (1996) の「前置開始要素 (pre-beginning elements)」、李 (1995) の「あのう」「ほら」等による「注目行動の要求表示」にあたる。「前置ターン開始表示」の後、ターンを取得し、ターンを続けた場合は、さかのぼって、その「前置ターン開始表示」もターンに含めることにする。ただし、「前置ターン開始表示」が他の参加者のターンによって遮られ、ターンが続けられなかった場合は、それ自体ではターンとはみなされないことにする。次に、二つ目の「ターン取得表示」とは、ターンを自主的に取る、または、取ったことを示すために用いる表示である。これは、ターンを取った直後の数秒の間に用いられる。例えば、李 (1995) の「えー (↓)」「うん (↓)」等による「発話順番の取得表示」がある。または、ターンを取ってそのままターンを続けることも「ターン取得表示」になる。三つ目の「ターン受取表示」とは、前のターンを取っていた参加者から情報要求、同意要求等で譲られたターンを受動的に取ることを伝えるために用いる表示である。これは、ターンを取る直前、または、直後の数秒の間に用いられる。例えば、李 (1995) の「はい (↓)」「えー (↓)」等による「発話順番の受取表示」がある。

次に、「ターン終了表示」とは、ターンが終わる直前、直後に用いられる表示であるとし、次の2つの表示に分類した。一つ目の「ターン放棄終了表示」とは、次のターン保有

者を選択しないで、ターンを終えることを示すために用いる表示である。これは、ターンが終了する直前、直後に用いられる。例えば、李 (1995) の「はい (↓)」「えー (↓)」「うん (↓)」等による「発話順番の終了表示」にあたる。二つ目の「ターン譲渡表示」とは、情報要求、同意要求等で次のターン保有者を選択してターンを譲ることを示すために用いる表示である。これも、主に、ターンが終了する直前、直後に用いられる。例えば、Sacks, Schegloff and Jefferson (1974) の付加疑問による「後置終了 (post-completers)」、李 (1995) の「ねえ」「でしょう (↑)」による「発話順番の譲渡表示」がある。

そして、「ターン開始の容認表示」とは、他の参加者が次にターンを取って開始することを認めることを示すために用いる表示である。これは、他の参加者のターンが始まった直後に用いられる。例えば、Goodwin (1980, 1981, 1986) の話に従事している表示 (engagement display) としての視線を送る行為が挙げられる。最後に、「ターン移行期表示」とは、ターン保有者が誰もいない状態の時期に用いられる表示である。例えば、Goodwin (1980, 1981, 1986) の話に従事していない表示 (disengagement display) としての視線を互いにそらす行為や、Maynard (1987, 1989)・メイナード (1993) のターン移行期の埋め込み表現 (turn-transition period filler) としての頭の縦ふりがある。

3.2 分析方法

3.2.1 会話資料・参加者背景

分析した会話資料は、20-30代の日本語母語話者3人(高志(T)、八重(Y)、中井(N))による42分間の日本語会話を録画撮りしたものである。本稿では、そのうちの5分20秒間の会話に1-55(合計45ターン)までの発話行番号を付け、発話行番号21-25(36秒間、合計8ターン)までを会話例として取り上げる。参加者は、撮影当時、全員が米国某大学に留学している大学生または大学院生であった。高志と八重は留学先の大学で知り合ってから1年半程度の親しい友人同士であり、中井(筆者)はこの二人と二ヶ月程度前に知り合い、会話収集の協力を頼んだ。三人とも「です・ます」体ではなく、くだけた話し方ができる程度の仲であった。

撮影当日、高志と八重には2つの会話に参加してもらった。一つ目の会話は、米国同大学の3年生の日本語クラス(授業時間数500時間以上)に在籍しているアメリカ人学生(ロン、スー)と初めて会い、4人で30分間程度自由に会話してもらうというものであった。そして、二つ目の会話は、この直後に行い、一つ目の会話についての印象・感想を調査者である中井が高志と八重に聞きながら、互いの異文化交流感を語り合うというものであった。本稿の分析資料は、この二つ目の会話である。

3.2.2 会話文字化資料表記方法

本稿で分析する会話の文字化資料の見方について説明する。まず、3人の参加者の発話の並べ方であるが、(1)にあるように、高志、八重、中井の発話はそれぞれT、Y、Nで示してある行の文字で表してある。また、23T、23Y、23Nの「23」という数字は、発話の行番号である。そして、このそれぞれの発話は、左から右に時系列に並んでおり、同時進行している。つまり、3人の参加者の発話は、3つの楽器で奏でる音楽の楽譜のようになっている(cf. 国立国語研究所1987、Ehlich 1993)。したがって、3人の参加者の発話の

流れは、まず、23T、23Y、23Nの3列の発話の中で、一番右側にある八重（Y）の23Y「まず、言葉選ぶもんねえ。」が一番始めに発せられ、次いで、高志（T）の23T「うん。」が発せられ、そして、中井（N）の23N「ああ。」が続き、八重（Y）の23Y「うん。後、まず、」という発話が続けられる。そして、行のスペースがなくなると、次の発話の行番号、つまり、24T、24Y、24Nに移行する。よって、一行は、一ターンとは限らず、一行に2ターン以上含まれる場合もあれば、1ターンの途中で次の行に移る場合もある。なお、ターンとして認定されたものには、(1)のように、言語的発話の文字をハイライトにし、それぞれのターン番号（例：①）を付けた。

(1) 参加者の発話の並べ方

23T: うん。 ③ うん。もっと考える。

23Y: ① まず、言葉選ぶもんねえ。 うん。 ② 後、まず、こんな調子を止めるよね、たぶんね。

23N: ああ。 ああ。

次に、本稿で分析した非言語行動の定義と会話文字化資料での表記の仕方、言語的発話と非言語行動表記の位置関係を【表3】にまとめた。

まず、頭の動き（Head movement, H）は、回数と大きさ（大、中、小）を区別し、そ

【表3】 会話文字化資料での非言語行動の記し方・言語的発話と非言語行動の表記の仕方と位置関係

位置関係 (行数)	言語行動/ 非言語行動	定義	記号化	意味
一行目	言語的発話			
一行目～ 四行目	頭の動き (うなずき)	頭部を下げて元の位置に戻す一連の垂直 の動作を一回の動きとする。	回数	
H			1回の垂直な頭の動き	
HHH			連続した垂直な頭の動き	
大きさ				
H			大きい頭の動き	
H			中ぐらいの頭の動き	
h			小さい頭の動き	
	手の動き	腕、肘、手首、手のひら、指等を用いる動作	[右手 を振 る----]	右手を振る動作
	咳き	咳き、咳払いをする動作で、そのために 手を口に当てる動作も含む。	[咳き]	咳きをする
	視線	どこ・誰を見ているか	<下>	前の行から引き続き下を見ている
(N)			視線の方向がNに変わる	
(下)			視線の方向が下に変わる	
(上)			視線の方向が上に変わる	
(前)			視線の方向が前に変わる	

それぞれの動きがあった瞬間を、言語的発話の位置に基づいて表記した。また、手の動き、咳きは、その動作が続いていた間を言語的発話にそって、[-----]で表した。また、視線は、< >で記してあるものは、前の発話の行から続いて同じところを見ている場合を示す。また、()で記してあるものは、参加者が新たに視線の位置を変えた瞬間を表し、その後、新たに視線の位置を変えるまで、つまり、_____が続いている所までずっと同じ位置にあることを示す。なお、その行に何も表記する言語的発話や非言語行動がない場合は、その行は省略し、下の行を繰り上げて表記した。

3.3 ターンの受け継ぎの表示の会話例

会話例 (2) にある発話行番号 21-25 までの会話部分では、調査者である中井が、高志と八重に対して、この会話収録の直前に日本語学習者ロンとスーと共に行った日本語による会話についての感想を聞いている。まず、中井の前からの続きのターンである 21N で、中井 (N) が「私とロンさんがいきなりシュッとスイッチした場合ね、なんか、自分でトーンが変わるとか。」と高志と八重を見てうなずきながら情報要求することによって、高志と八重のどちらかを次のターン保有者として選択し、ターンを譲渡している (ターン譲渡表示)。この情報要求は、もし母語話者である中井とロンが今行われている会話の中で入れ替わった時に、高志と八重の話し方が変わるかという意味である。そして、八重が、22Y の図 1 のように、前を見ながら「うん、変わるねえ、」と言って、うなずき、背中を掻いて (図 1 の実線矢印) 後ろにもたれてから中井を見ることにより、ターンを開始している (ターン受取表示)。この八重の背中を掻きながら後ろにもたれる非言語行動は、中井から投げかけられたターンを受け取って後ろに下がっているのではないかと考えられる。そして、この 22Y の八重のターンの途中で、中井は 22N で数回うなずきながら「うーん。」というあいづちを用いることにより、八重のターン開始を受け入れている (ターン開始の容認表示)。そして、図 2 のように、八重と中井は視線を合わせ (点線矢印)、さらに、中井が「どんな感じで変わる。」とうなずきながら情報要求することによって、ターンを自己選択して開始している (ターン取得表示)。このターンは同時に、八重に対する情報要求であるので、八重を次のターン保有者として選択し、次のターンを譲ることになる (ターン譲渡表示)。

そして、この中井の情報要求に対して、八重が 22Y で「なんか、」(ターン受取表示) と情報提供を始め、23Y の「まず、言葉選ぶもんねえ。」と続く。この八重のターンは、高志と中井からの視線と 23Ta の「うん。」と 23Na の「ああ。」というあいづちで受け入れられている (ターン開始の容認表示)。続いて、八重は、「こんな調子を止めるよね、たぶんね。」と言いながら、高志を見、同意要求の終助詞「ねえ」を用いてうなずくことによって、高志を次のターン保有者として選択している (ターン譲渡表示)。

そして、高志は、23Tb でうなずきながら「うん。」と言って八重に同意し (ターン受取表示)、「もっと考える。」とターンを続けている (ターン取得表示)。この高志のターンは、八重と中井からの視線と中井の 23Nb の「ああ。」というあいづちと複数のうなずきによって受け入れられている (ターン開始の容認表示) そして、高志は 24T で「ゆっくりになって、うーんとか言って。」と、さらにターンを続けるが、このターンの最後に次のターン保有者を選択せず、下を向いたままターンを終了している (ターン放棄終了表示)。

その後、24Nで中井が「うーん。」と数回うなずき（ターン移行期表示）、接続表現「で」を用いて（前置ターン開始表示）次のターンを開始している。このターンで、中井は、八重、それから、高志を見て、「で、この言葉分かるかなとか確かめたりとかあ。」とターンを続けることによってターン取得表示をしている。そして、このターンは同時に、ロンと話す時のことについて同意要求しているの、ターン譲渡表示にもなる。

そして、この中井のターン譲渡表示を受けて、25Yで八重が上を見てから前を向いて

(2) 会話例

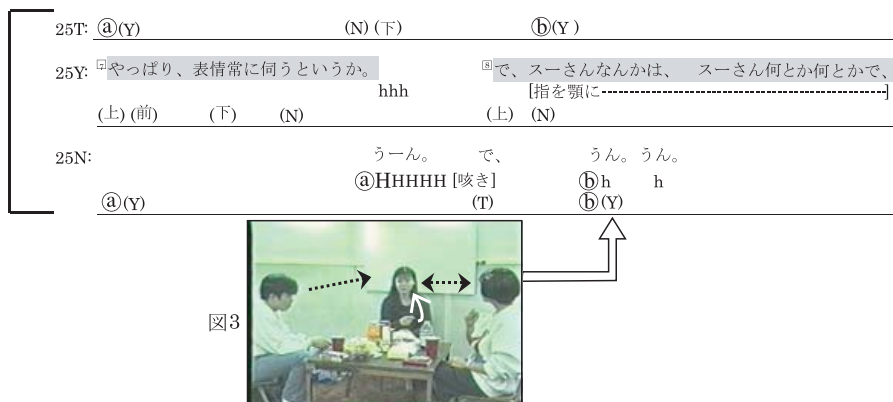
21T: <N>
 21Y: <N> (F)
 21N: ^①私とロンさんがいきなりシュッとスイッチした場合ね、なんか、自分でトーンが変わるとか。
 [左手を右から左へ動かす、右手を右から左へ動かす] H [右手の平を [右手を口元平らに動かす] にかけていく] HH (T) (Y) (T) (Y)

22T: (F) (N)
 22Y: ^②うん、変わるねえ、やっぱりねえ。 変わるよねえ。 ^③なんか、さっきの話じゃないけど、
 H H H hhh [右手で背中を掻いて後ろにもたれる] (前) (前)
 22N: うーん。 ^④どんな感じで変わる。
 ①<Y> ②H H H (T) ③H H H (Y) ④(Y)



23T: ^①うん。 ^②うん。 もっと考える。
 ①<Y> ②H H (N) ③h (Y) (N) (F)
 23Y: まず、言葉選ぶもんねえ。 うん。 で、こういう調子を止めるよね、たぶんね。
 H H [右手を前に二回振る] H h (前) (T) (N) (T)
 23N: ^④ああ。 ^⑤ああ。
 ④<Y> ④H HH[咳き] (T) (Y) (F) (Y) ⑤H HH (T)

24T: ^⑥ゆっくりになって。 うーんとか言って。
 <F> ⑥H ⑥h (N)
 24Y: <T> (F) (N)
 24N: うーん。 ^⑦で、この言葉分かるかなとかかって確かめたりとかあ。
 ⑥<T> ⑥HH ⑦H HH (Y) H H (T)



(ターン受取表示)、「やっぱり、表情常に何うというか。」と言って答えている。この八重のターンは、高志と中井からの視線によって受け入れられている(ターン開始の容認表示)。その後、八重は次のターン保有者を選択せずに複数うなずき(ターン放棄終了表示)、次に誰がターンを取るか分からないターン移行期中に、中井が「うーん。」というあいづちを打ちながら数回うなずいている(ターン移行期表示)。

そして、中井は、次に八重がターンを続けなかったため、咳きをした後で、「で、」ということにより、次のターンを取ろうとする(前置ターン開始表示)。しかし、この後すぐに八重が同じく「で、」(前置ターン開始表示)を用い、図3の実線矢印のように、指を顎に当て始めながら中井を見て(点線矢印)「スーさんなんかは、」と続け(ターン取得表示)、ターン取得に成功している。この八重の指を顎に当てる非言語表示は、八重と中井のどちらが次にターンを取るか決まっていない状況で、ターンを自分の方へ引き寄せている動作のように見える。そして、この八重のターンは、中井による八重への視線(点線矢印)とうなずきを伴った「うん。うん。」というあいづちで受け入れられている(ターン開始の容認表示)。ここで、高志も八重を見ることによって八重のターン開始を容認している。なお、中井の25Nの前置ターン開始要素「で」は、八重の25Yの「で」に続くターンに遮られ、中井はその後、ターンを続けなかったため、この中井の「で」はターンとはみなされない。

以上の分析結果を【表4】にまとめた。まず、ターン開始表示としての前置ターン開始表示、ターン取得表示、ターン受取表示では、「で」のような接続表現、「うん」のような応答表現と共に、視線・手・頭の動き、咳きによる非言語的表示が見られた。ターン開始では、他の参加者の注目を集めなければならないため、このような様々な言語・非言語的表示を積極的に用いているのではないかと考えられる。次に、ターン終了表示では、ターン譲渡表示とターン放棄終了表示の違いが見られた。まず、次のターン保有者を選択してターンを終了するターン譲渡表示では、情報要求、同意要求の終助詞「ね」等の言語的表示と、複数うなずいたり、ターンを譲渡した参加者に視線を送ったりする非言語的表示が共に用いられており、より積極的なターンの受け継ぎの表示が観察された。これは、ターンをゆだねようとしている相手に確実にターンが渡るように、言語的・非言語的表示を明示的に送っているからだと考えられる。しかし、これに対して、次のターン保有者を選択しないでターンを終了するターン放棄終了表示では、下を向いたまま1回だけうなずいて

【表4】 会話例(4)におけるターンの受け継ぎ表示の分析結果のまとめ

ターンの受け継ぎ表示		言語的要素	非言語的要素
1. ターン 開始表示	a. 前置ターン開始表示 (自己選択)	* 「で」(24N、25N、25Y)	* 咳き(25N)
	b. ターン取得表示(自己選択)	* ターンを続ける	* うなずく(Nb) * 指を顎に当てて、発話が重複した参加者に視線を向ける(25Y)
	c. ターン受取表示 (他者に選択される)	* 「うん、」(22Y) * 「なんか、」(22Y) * 「うん。」(23Tb)	* うなずき、背中を揺きながら後ろにもたれる、ターン譲渡者に視線を向ける(22Y) * うなずく(23Tb) * 上を見てから前を向く(25Y)
2. ターン 終了表示	d. ターン放棄終了表示 (次のターン保有者を選択しない)		* 下を向いたまうなずく(24Tb) * 複数うなずく(25Y)
	e. ターン譲渡表示 (次のターン保有者を選択する)	* 情報要求(21N、22N) * 同意要求の終助詞「ねえ」(23Y) * 同意要求(24N)	* (複数)うなずき、ターンを譲渡したい参加者に視線を向ける(21N、22N、23Y、24N)
3. ターン開始の容認表示		* 「うーん。」(22N) * 「うん。」(23Ta) * 「ああ。」(23Na) * 「ああ。」(23Nb) * 「うん。うん。」(25N)	* (数回)うなずく(22Na、23Ta、23Na、23Nb、25Nb) * ターン開始者に視線を向ける(22Na、22T、22Nb、23Ta、23Na、23Y、23Nb、25Ta、25Na、25Nb、25Tb)
4. ターン移行期表示		* 「うーん。」(24N、25N)	* 数回うなずく(24Na、25Na)

黙ってしまう等のように、より消極的なターンの受け継ぎの表示が見られた。これは次のターン保有者を誰にするかという決定を他の参加者にゆだね、自分はその決定に積極的に関与しないでおこうという態度の表示であると考えられる。次に、ターン開始の容認表示としては、「うん。」「ああ。」のようなあいづちと共に、ターン保有希望者に視線を向けたたり、うなずいたりする行動が見られた。視線は、概してターンが今ある方向に向けられる傾向があり、これは、Goodwin (1980、1981、1986) が分析しているように、ターン保有者の話を聞こうとする態度の表れであると言える。最後に、ターン移行期表示としては、「うーん。」というあいづちと共に、複数のうなずきが用いられていた。これは、次のターン保有者がターンを取るまでのつなぎ的役割をしていると考えられる。

4. ま と め

以上、ターンの受け継ぎの構造とターンの受け継ぎの表示の分類をもとに、3者間による日本語会話で用いられている言語的・非言語的ターン表示の例を分析してみた。山崎・好井(1984:88)によると、ターンの受け継ぎは、「当事者たちが常に話し手-聞き手にな

り得るといふ相互的な関係性の中で、その使用は管理、決定されている」という。さらに、山崎・好井（1984: 88）は、Sacks, Schegloff & Jefferson（1974: 727）のターンの受け継ぎのシステムにおける「受け手志向性（recipient design）」を強調し、「会話における話は常に他の会話参加者に向けられて」おり、「話し手は常に相手に聞いてもらえるような形で話し、相手は話し手が話せるような形で聞こうとする」と述べている。このように、ターンの受け継ぎは、参加者同士の相互作用において、その時その時の瞬間で次に誰が話すかという表示を送り、また、それを受け入れる表示をして、言語的、非言語的に会話を進めていると言える。

本稿では、言語・非言語的ターンの受け継ぎの表示の分類を主な目的としたが、実際の会話データにおけるより詳細な分析は、次稿に譲りたいと思う。また、今後の課題として、本稿で分析したターンの受け継ぎという局部的構造が、会話や話題の開始部、終了部等の全体的構造（overall organization）の中でどのように関係しているのかを探ることが必要であると考えられる。その際、ターンという単位の他、「二人の参加者の協力で作上げる」（ザトラウスキー 1991: 87）話段⁴などの単位が有効であるのか、局部的構造、全体的構造の両方の関係を同時に分析していくことが必要であると言える。ザトラウスキー（1998、2002a）が分析した話題や話段の開始部では、談話表示、接続表現、同意要求、情報要求、「まあ」「なんか」等の言語的要素の他、視線を合わせること、手、指による指示的な動作と図像的な動作等の非言語的要素が用いられる傾向があったとしている。また、終了部では、終了の発話機能、相づちの繰り返し「そうですか。」「まあ」「なんか」、倒置等の言語的要素の他、うなずきの繰り返し、笑い、無表情、視線を反らすこと、沈黙、手の脱力、基本姿勢へ戻る等の非言語的要素が用いられる傾向があったとしている。このような話題や話段の開始部・終了部で用いられる要素と、本稿で分析したターン開始表示とターン終了表示とは、大いにつながる部分があると言える。また、Szatrowski（2000）、ザトラスキー（2001）では、「発話」という単位を用いて、視線、うなずき、あいづちがどのように相互的な関係を持っているかを分析している。今後は、このような「発話」と本稿で分析した「ターン」に共通して現れる言語・非言語行動の比較分析も必要であると考えられる。

さらに、言語・非言語行動の機能は一つではない。場面、参加者の人数・人間関係で、解釈は様々に変わる。本稿では、ターンの受け継ぎの観点から言語・非言語行動によるターン表示を見たが、今後は、より多くのデータから、言語・非言語行動が参加者間の相互作用の中でいかに用いられているか、様々な視点で分析していきたいと思う。さらに、母語話者と非母語話者の接触場面における言語・非言語行動の分析を行った上での日本語教育への応用も今後の課題としたい。

謝 辞

本稿の執筆に当たり、早稲田大学の宮崎里司助教授、及び、米国ミネソタ大学のポリー・ザトラウスキー準教授に貴重な御助言を頂いた。深く感謝申し上げます。

注

- 1 Levinson (1983) は、会話の構造として、局部的構造 (local organization) と全体的構造 (overall organization) を挙げている。局部的構造とは、「ターン(turn)」・「応答ペア」・「先行発話連鎖」等、前と後ろのターンの関係を扱う単位のことを指し、全体的構造とは、「開始部」・「話題の連鎖」「終了部」等、複数のターンが関係している会話としての大きいまとまりの単位のことを指すとしている。
- 2 杉戸 (1987:88) は以下のようにあいづち的な発話と実質的な発話を区別している。
 1. あいづち的な発話: 「ハー」「アー」「ウン」「アソーデスカ」「サヨーデゴザイマスカ」「エーソーデスネー」などの応答詞を中心にする発話。先行する発話をそのままくりかえす、オーム返しや単純な聞きかえしの発話。「エーッ!」「マア」「ホー」などの感動詞だけの発話。笑い声。実質的な内容を積極的に表現する言語形式 (たんなるくり返し以外の、名詞、動詞など) を含まず、また判断・要求・質問など聞き手に積極的なはたらきかけもしないような発話。
 2. 実質的な発話: あいづち的な発話以外の種類の発話。なんらかの実質的な内容を表す言語形式を含み、判断・説明・質問・回答・要求など事実の叙述や聞き手へのはたらきかけをする発話。(杉戸 1987:88)
- 3 本稿では、杉戸 (1987) の実質的な発話とあいづち的な発話の区分を採用する。ただし、杉戸 (1987) があいづち的な発話に含めている「応答詞」「感動詞」「笑い」はあいづち的な発話として含めるが、「オーム返し」や「単純な聞きかえしの発話」はあいづち的な発話として含めず、実質的な発話からなるターンとして認定した。
- 4 ザトラウスキー (1991) は、「話段」を以下のように定義している。詳しいデータ分析は、ザトラウスキー (1991, 1993) 参照。

「話段」とは、一般に、談話の内部の発話の集合体 (もしくは一発話) が内容上のまとまりをもったもので、相対的に他と区分される部分である。前後の発話集合 (もしくは一発話) が、それぞれの参加者の「目的」となんらかの距離と連関を持つことによって区分される。「勧誘の話段」と「勧誘応答の話段」は、話題・発話機能・音声による特徴がある。(中略)「話段」を特徴づける面として、「メタ言語的発話」、「イニシアティブ」、「発話交替」等が挙げられる。(ザトラウスキー 1991:84-85)

ここで挙げられている「発話交替」とは、ザトラウスキー (1993: 154) では、「発話機能が入れ替わる」ことであるとしている。

参考文献

- 国立国語研究所 (1987) 『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相—座談資料の分析』三省堂
- ザトラウスキー、ポリー (1991) 「会話分析における単位について—「話段」の提案」『日本語学』10: 10 pp.79-96. 明治書院
- (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版
- (1998) 「初対面の会話における話題を作り上げる言語・非言語行動の分析」『社会言語科学会第二回研究発表大会予稿集』 pp.23-28. 社会言語科学会
- (2001) 「相互作用における非言語行動と日本語教育」『日本語教育』7-110 pp.7-21. 日本語教育学会
- (2002a) 「アニメーションのストーリーを語る際の話段と中心発話について」『表現研究』76 pp.33-39. 表現学会
- (2002b) 「日米におけるアニメーションのストーリーの語り方と非言語行動の相違」『総合的日本語教育を求めて』水谷修・李徳奉編, pp.187-201. 国書刊行会
- 杉戸清樹 (1987) 「発話の受け継ぎ」『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相—座談資料の分析』 pp.68-106. 三省堂
- スティーブン・レビンソン (1990) 『英語語用論』安井稔・奥田夏子訳 研究社

- 高梨克也 (2002) 「会話連鎖の組織化過程における聞き手デザインの機能」『社会言語科学会第10回研究大会予稿集』 pp.191-196. 社会言語科学会
- 中田智子 (1990) 「発話の特徴記述について—単位としての move と分析の観点」『日本語学』 11-9 pp.112-118. 明治書院
- 西原鈴子 (1991) 「会話の turn-taking における日常的推論」『日本語学』 10-10 pp.10-18. 明治書院
- 牧野由実 (2000) 「日本語学習者のためのターン・テーキング教育を目指して—大学生の日常会話を資料として」『日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp.98-103. 日本語教育学会
- メイナード、泉子 (1993) 『会話分析』 くろしお出版
- 山崎敬一・好井裕明 (1984) 「会話の順番取りのシステム—エスノメソドロギーへの招待」『月刊言語』 13-7 pp.86-94. 大修館書店
- 李麗燕 (1995) 「日本語母語話者の会話管理に関する一考察—日本語教育の観点から」『日本語教育』 87 pp.12-24. 日本語教育学会
- (1999) 「日本語母語話者の雑談における「物語の開始」—発話順番のやり取りとの関係を中心に」『世界の日本語教育』 9 pp.221-239. 国際交流基金日本語国際センター
- Bergmann, J. R. 1990. On the local sensitivity of conversation. *The dynamics of dialogue*, ed. by Ivana Markova and Klans Foppa, 201-226. London: Harvester Wheatsheaf.
- Duncan, Starkey Jr. and Donald W. Fiske. 1985. *Interaction structure and strategy*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Edelsky, Carole. 1981. Chapter 8: Who's got the floor? Gender and conversational interaction, ed. by Deborah Tannen, 189-227. Oxford: Oxford Studies in Sociolinguistics.
- Ehlich, Konrad. 1993. Chapter 5: HIAT: A transcription system for discourse data. *Talking data: Transcription and coding in discourse research*, ed. by Jane A. Edwards and Martin D. Lampert, 123-148. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Goodwin, Charles. 1980. Restarts, pauses, and the achievement of a state of mutual gaze at turn-beginning. *Sociological Inquiry* 50: 272-302.
- . 1981. Chapter 3: Notes on the organization of engagement. *Conversation organization*, 95-125. New York: Academic Press.
- . 1986. Gesture as a resource for the organization mutual orientation. *Semiotica* 62.1/2: 29-49.
- Levinson, Stephen. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Maynard, Senko. 1987. Interactional functions of a nonverbal sign: Head movement in Japanese dyadic casual conversation. *Journal of Pragmatics* 11: 589-606.
- . 1989. *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management*. Norwood, New Jersey: Ablex Publishing Corporation.
- Sacks, Harvey, Emanuel Schegloff and Gail Jefferson. 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50. 4: 696-735.
- Schegloff, Emanuel. 1982. Discourse as an interactional achievement: Some uses of 'uh huh' and other things that come between sentences. *Georgetown University Roundtable on languages and linguistics*, ed. by Deborah Tannen, 71-83. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- . 1996. Turn organization: One intersection of grammar and interaction. *Interaction and grammar*, ed. by Elinor Ochs, Emanuel Schegloff and Sandra Thompson, 52-133. Cambridge: Cambridge University Press.
- Szatrowski, Polly. 2000. Relation between gaze, head nodding and *aizuti* 'bach channel' at a Japanese company meeting. *Berkeley Linguistics Society* 26: 283-294.